

『十字架につけられた救い主・1』

’21/10/31

聖書箇所:マルコの福音書 15章 21-32節(新約 p.101)

今年は、西暦 2021 年…、この西暦という年号は、イエス・キリストのご生誕を紀元としています。…と言いましても、この西暦が制定されたのは西暦6世紀頃なので、その時から 500 年以上遡って、イエス様のお生まれになった年を“西暦0年”と定めただけで…、それが、歴史的に検証してみると、数年ほどのズレがあるということが分かっています。ま、しかし、イエス・キリストのご生誕というものは、それほどに、大きい“歴史的な出来事”であったと言い得るわけです。

でも、聖書のみことばを見てみますと、そのような…、イエス様のご生誕に関する記事は、4つある福音書の中の、ルカの福音書にしか記されてありません。確かに、イエス様のご生誕…、と言うか、イエス様は、天から下ってこられた神なる御方なので、正しくは、「御降誕」と言いますけれども、そういったことは、この聖書のみことばが間違いなく教えてくれている歴史的事実ではありますが…、それ以上に、重要な出来事が、イエス・キリストが十字架にかかられた！また、その3日目によみがえられた！という歴史的事実であります。

命題: イエス様が十字架に磔にされた時、どのようなことがあったでしょう？

そこで、今日と来週で、私たちは、イエス・キリストがああ十字架にかかってくれたという事を教えてくれている聖書のみことばを学んでまいります。あのイエス様が十字架に磔にされた時、具体的には、どのようなことが起こったのでしょうか？…また、そこから、私たちは、どういったことを学んでいける？あるいは、学んでいくべきなのでしょう？

願わくは、今回のメッセージを聞いてくださった皆さんが、果たして、イエス・キリストというお方が何者であったのか？その正体を知ることができ…、そのイエス様が与えようとしてくださった救いの恵みに預かることができるだけでなく…、そのイエス様への感謝と献身の気持ちを増すことができ…、ますます、そのイエス様に似た者へと変えられていこうになっていくことを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今回のみことばであるマルコ 15:21 以降をお開きくださいますでしょうか？

I・イエス様は、**極限**の苦しみを経験された！(21-23節)

どうぞ、まずは、今回のみことばの内、21-23節の部分を見ていきましょう…。このみことばは、**あのイエス様が、“極限”の苦しみを経験された！**ということを教えてくれています。まずは、そういったことを確認していききたいと思います。そこには、このように記されてあります。

21 そこへ、アレキサンデルとルポスとの父で、シモンというクレネ人が、いなから出て来て通りかかったの、彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた。

22 そして、彼らはイエスをゴルゴタの場所(訳すと、「どくろ」の場所)へ連れて行った。

23 そして彼らは、没薬を混ぜたがどう酒をイエスに与えようとしたが、イエスはお飲みにならなかった。

●イエス様は、十字架の **横木** を背負えなくなった！

どうぞ、皆さん…。まずは、ここ 21 節以降のみことばの“主語”に注目してみてください。「主語」とは、文章の動作や状態の主体となっているもののことです。…例えば、ここ 21 節以降の主語を見ていきますと、『シモンというクレネ人が…』とか、その後の『彼らは…』という部分です。ここ 21 節の『彼らは…』という部分は、ローマ兵たちのことを指しています。

また、22 節と 23 節では、同じくローマ兵たちのことを指して、『彼らは…』という主語が使われてありま

す。また、23 節の後半では、『イエスは…』という主語が使われてあります。…24 節では、また、ローマ兵たちを指して、『彼らは…』と訳されてあります。今度、25 節では、同じく、ローマ兵たちを指して、『彼らが…』とあります。26 節は、ちょっとややこしいのですが、『イエスの罪状書きには…』というのが主語と言い得ると思います。また今度、27 節の主語は、また、ローマ兵たちを指して、『彼らは…』とあります。28 節は欄外にありますので飛ばして、29 節では、『道を行く人々は…』です。もう少し！今度、31 節は、「祭司長たちと律法学者たち」です。…そうして、32 節の後半で、『イエスといっしょに十字架につけられた者たち』というのが主語になっています。

さて…、こういったことから何が分かるのか？⇒実は、たった今、皆さんにも確認してもらいましたように、今回私たちが学ぼうとしているみことばは、ほとんど、イエス様以外の存在が主語になっていて…、ほとんど、イエス様が、これをされた！あれをされた！というような記述はありません…。そういったことだけでも、イエス様が十字架にかかられた時は、イエス様が“なされるがまま”であったか…、イエス様が受動的であったということを知ることが出来るように思います。ま、そういったこともあって、今回のメッセージのテーマは、イエス様が教えてくださった…、何かの教訓であるとか、何らかの教義的なものにはなっていないわけです。

さあ！それでは、今日のみことばの 21 節に戻っていただきまして、今回のみことばが訴えてくれている内容に注目していきましょう！…先程も言いましたように、ここ 21-23 節では、特に、あのイエス様が、“極限”の苦しむとも言わべきものを経験された！ということについて教えてくれています。

実際、ここ 21 節のみことばには、本来、イエス様が背負うべき十字架…、厳密には、十字架を構成する“横木”の部分であると思われそうですが、その横木を、途中から、クレネ人シモンに無理矢理背負わせた、ということが記されてあります。…一体どうして、本来、イエス様が背負って、ゴルゴタにまで行くべきなのに、ローマ兵たちは、その横木を、別の人物に背負わせたのでしょうか？

⇒このことは、4福音書すべてを見ても、はっきりとした理由が明記されてありませんが、イエス様が、極限的な苦しみを経験されて…、そのイエス様が背負えなくなったからだ！というのは、ほぼ間違いありません。

ここで、少し話が逸れるように思われるかも知れませんが…、イエス様が、この地上に存在されていたのは、今から 2000 年も前のことですから、イエス様の動画や写真はおろか、銅像の類もありません…。そのため、現代の私たちが「イエス・キリスト」と聞いて、イメージするのは、どうしても、あの十字架に磔にされているイエス様の像や、ヨーロッパの芸術家たちが描いたイエス様の絵画を思い出ししてしまいます。映画でも、イエス様を演じる俳優さんの多くは、色白で、鼻が高く、痩せたイケメンの方が演じておられます。…でも、皆さん、気付いてくださっていますよね？…イエス・キリスト像や絵画のイエス様のほとんどは、ヨーロッパと言うか、欧米人のような顔つきで、明らかに、パレスチナと言うか、ユダヤ人っぽくありませんでしょ？

ああいったもののほとんどは、自分たちの文化やイメージから作られたもので、実際の史実に基づいたものではありません。…ちょうど、1ヵ月程前に私たちが学んだように、「最後の晩餐」と聞けば、つい、私たちが皆、あのレオナルド・ダ・ヴィンチの描いた「テーブルとイスがあって…」というようなスタイルをついついイメージしてしまうと同じです。…でも、実際には、あの当時は、食事を乗せた“低い”テーブルの周りを、当時は皆、左ひじを床について、言わば、寝転んだような姿勢で食事をしていたはずなのです！

現代のユダヤ人の多くは、長い間、祖国を失っていたせいもあって、かなり混血が進んでいると言われています。しかし、2000 年前はそうではありませんでした。ももとのユダヤ人は？と言いますと、色黒で、背が低かったそうです。また、イエス様は 30 歳の頃まで、大工をしておられたわけですから、恐らくは、がっしりした体形だったのではないのでしょうか？…また、大工であったイエス様からすれば、どちらかと言うと、木を運ぶという作業は、多少、得意であったのかも知れません…。

そんなイエス様が、途中で、横木を運べなくなった、と言うのも無理ありません。…と言いますのも、先週の礼拝でも学んだように、当時、イエス様が受けられた「むち打ち」とは、「数本の革ひもに金属片や動物の骨などを付けたような構造になっており、それらが肉に食い込み、ひどい苦痛を与えた…」というようなものだったそうですから、恐らく、背中は大変な大ケガであったことでしょう…。オーバーかも知れませんが、ひょっとしたら、肉がえぐれて、骨が見えていたような状況だったのかも知れません。しかも、その前日、イエス様は、あのゲツナメノ園で、「死ぬほどの悲しみ」を経験されて(マルコ 14:34)…、徹夜だったわけですから。その後、イエス様は捕らえられて…、幾つもの裁判にかけられて、強引に死刑判決を下されてしまうわけです。…その後、イエス様は、600 名ものローマ兵に引き渡されて、ムチ打たれ…、これから、自分がかかるとなる十字架の…、あの重い横木を背負って、「ヴィア・ドロローサ」、悲しみの道を、言わば、“見せしめ”として歩かされるわけです。

今でも、エルサレムにある「ヴィア・ドロローサ」と呼ばれている道に行きますと、たくさんのポイントが記されていてありまして、ここでイエス様がむち打ちを受けられたとか、あるいは、ここでイエス様が最初に倒れられた…、2度目に倒れられたとか、また、この辺りで、クレネ人シモンに十字架を背負わせたというポイントがあったりします。

実は、このクレネ人シモンという人物ですが、クレネというのは、今で言うところの、「北アフリカにあった海岸都市」になります。今、前の画面に表示してある地図の、黄色い丸で囲ってある部分がイスラエルです。そうして、赤い丸で囲ってある都市が「クレネ」です。…ですから、恐らく彼は黒人であったと思われると思います。ここ 21 節のみことばによりますと、「彼は、アレキサンデルとルポスの父親」であったということは分かります。何だか、ここで、『アレキサンデルとルポス』という名前が唐突に出てきていることから、多くの聖書研究者たちは、アレキサンデルとルポスとは、初代教会では、結構知られていたクリスチャンたちであったのではないかと考えられています。実際、ローマ書 16 章には『ルポス』というクリスチャンの名前が記されています。また、そういったような考えから、一説では、このクレネ人シモンは、後になって、アンテオケ教会の指導者になったという説もあります。

皆さん、覚えてくださっていますか？…例えば、マタイ 5:41 には、「山上の説教」の一部分で、イエス様は、こんなことを教えてくださいます。『あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。』って…。実は、そののみことばを学んだ時にも、お話ししたのですが、この当時のユダヤは、ローマの占領下であったので、彼らは、基本、ローマ軍の言うことに逆らうことができませんでした。

ま、そういった中で、当時ユダヤには、ローマから重い税がかけられていたのですが、それ以外にも、ローマから「徴用」という義務も課せられておりました。具体的には、ローマ兵から、剣ややりなどの平たい部分で肩を叩かれると、誰であっても、ある程度の“協力”をすることが決められていたそうです。…ちなみに、その協力の標準的なものが、1ミリオン…、つまり、今の距離にして、約 1.5 キロを移動する、あるいは、荷物を運ぶというようなことだったそうです。

さきほどのポイントにしても、また、このシモンの話にしても…、ま、そういったことは皆、今から 2000 年も前のことなので、どこまで確かなのか分かりません…。しかし、イエス様が、大変な苦しみを経験された！という事は間違いありません。…間違いなく、イエス・キリストというお方は、2000 年近く前、ガリラヤやあのエルサレムの町で存在されて…、たくさんの奇蹟を行ない、また、多くのメッセージを残されて後…、あの十字架へとかかっていかれたのです！

● 没薬を混ぜたぶどう酒を 飲まれ なかった！

そういった流れの中で、今日のみことばの 22 節は、そのイエス様が、『ゴルゴタ』という場所へ連れていかれた、ということが教えられています。実は、このゴルゴタですが、正確な場所は分かっていません。…もちろん、エルサレムの神殿の近くにあったことは分かっています。それと、今日のみことばにも、『(訳すと、

「どくろ」の場所』という説明書きがあることから、多少のヒントがあります。しかし、この『どくろ』という名前の由来が、実際に、たくさんどくろ(≒人間の頭蓋骨)が転がっていたせいなのか？あるいは、その丘が、一見、どくろのような特徴を持っていたのか？そういったことが、実は、あまり定かではありません。

実は、今、エルサレムの町へ行ってみますと、イエス様が、この時、十字架にかけられたという場所には、「聖墳墓教会」というギリシャ正教の教会堂が建っています。もしも、聖書に出てくる「ゴルゴタの丘」が、今の聖墳墓教会の場所にあったのなら…、前の画像を見てくださったなら分かる通り、もう、その場所は、現在の教会堂の下に埋まってしまっているのだから、今から 2000 年ほど前に、どのような外観をしていたのか確かめる術はありません。

それと、もう一つ、「この場所が、ゴルゴタの丘ではないか？」と考えられている場所があります。それが、「ゴードンのカルバリ」と呼ばれてある場所で、実は、ここの場所は、19 世紀になってから発見されたような場所です、つい最近まで、あまり知られていませんでした。しかし、多くのプロテスタントの教会は、こちらの方を支持しているようです。…前の写真を見てくださったなら分かる通り、ここの場所は、見ようによっては、人間の頭蓋骨のような形をしているように見えなくもありません。…でしょ？(笑)

ここの丘の上に、「園の墓」と呼ばれている…、イエス様のご遺体を葬ったとされるような横穴もありまして、その穴の中に、今では、「ここにはおられません。よみがえられたからです」という意味の英語の札が貼ってあるわけです。…しかし、そういったことも、今から 2000 年前の出来事だということで、どこの、当時のゴルゴタなのか、はっきりしたことは、残念ながら分かりません…。

しかし、いずれにしても、この時、イエス・キリストが『ゴルゴタ』という場所で、十字架に磔にされたこと…、それとまた、この時に、イエス様が大変な苦しみを経験された！ということに間違いはありません…。どうぞ、今度は、今日のみことばの 23 節をご覧ください。そこには、こう記されておりました、『そして彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒をイエスに与えようとしたが、イエスはお飲みにならなかった。』って…。

実は、この時、ローマ兵たちがイエス様に与えようとした、「没薬を混ぜたぶどう酒」と言いますのは、処刑されている人物の感覚を鈍らせて、その囚人を扱いやすくするための毒酒です。恐らく、ローマ兵たちは、イエス様のことを、この後、十字架に磔にするに当たって、少しでも抵抗されないように、麻酔代わりに、「没薬を混ぜたぶどう酒」を飲ませようとしたのだと思われます。…しかし、イエス様は、それを飲むとはされませんでした。恐らく、それは、イエス様が、少しの麻酔も使うことなく…、本来ならば、私たちが経験するべきであった“罪の罰のすべて”を経験して下さった！と考えられています。

II・預言の 成就 ! (24-32 節)

では、次に、今回のみことばの内、24-32 節の部分を見ていきましょう…。こののみことばは、特に、救い主であられるイエス様が十字架につけられるということが、“預言”されてあって、しかも、それが“成就”した！ということを教えてくださいます。24-32 節には、このように記されています。

24 それから、彼らは、イエスを十字架につけた。そして、だれが何を取るかをくじ引きで決めたとうで、イエスの着物を分けた。

25 彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九時であった。

26 イエスの罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。

27 また彼らは、イエスとともにふたりの強盗を、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけた。

29 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おお、神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。

30 十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」

31 また、祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。「他人は救ったが、自分は救えない。」

32 キリスト、イスラエルの王さま。今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。」また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった。

●イエス様の着物をくじ引きで分けた！

さて、ここ 24 節では、どうとう、イエス様が十字架に磔にされてしまった！ということが、割とすんなりと記されてあります。実は、この時、イエス様が磔にされたときとされる十字架刑は、前の画面に表示されてあるような…、腰の辺りに、若干の体重をかけられるような「出っ張り」があったのではないかと推察されています。…この画像は、新聖書辞典に載ってあったもので、エルサレム付近で発見された遺骨に基づいて、こういったような形状が推察されるのだそうです。

実は、十字架刑と言いますのは、前の画像にあるような…、囚人が体重をかけられるような場所が無いと、体重によって手の部分の肉が裂けたり、あるいは、関節が外れて囚人が十字架から落ちてしまうのだそうです。…それと、十字架刑は、長く苦しみ続けることでも知られています。この後で見えてきますが、イエス様の場合、朝の9時頃に十字架刑に処されて、午後3時過ぎに亡くなられたわけですから、6時間ほど苦しまれた計算になります。…それでも、短い方だったのです！

それと、実は、私も教会に来る前は、何となくそう思っていたのですが、この時、イエス様の両手が釘付けにされるわけですが…、その時、釘は、掌に打つのではなくて、手首の辺りに打つのだそうです。…じゃないと、体重によって、掌の肉が裂けて、囚人が十字架から落ちてしまうのだそうです。

それと、イエス様がかけられた十字架は、恐らくは、この画像のような…、「十字型」と言うよりも、上の部分が無かったような「T字型」の可能性もあるそうです。…しかし、イエス様が磔にされた十字架には、「これはユダヤ人の王」というような罪状書きが書かれてあって…、しかも、ヨハネ伝を見ると、それが、ヘブル語、ラテン語、ギリシャ語という3種類の言語で書かれてあったわけですから、それを貼り付ける部分のことを考えると、やはり、十字型であったのかも知れません…。

どうぞ、24 節の後半に注目してみてください。そこには、『…だれが何を取るかをくじ引きで決めようとして、イエスの着物を分けた。』とあります。現代だったら考えられないと思いますが、この当時は、そういう時代だったのでしょ…。何と、死刑囚であるはずのイエス様の着ていた物を、ローマ兵たちがくじ引きで分け合ったというのです。

実は、その時のことが平行記事であるヨハネ 19 章には、こう記されてあります。ヨハネ 19:23-24、『23 さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。24 そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた」という聖書が成就するためであった。』って…。

⇒皆さん、聞いてくださいましたか？…何と、イエス様の着物を分け合ったとか、着ていた下着のために、くじを引いたなんていう風なことまで、旧約聖書に預言されてあったと言うのです！…実は、詩篇 22 篇には、こんなみことばが記されてあります。詩篇 22:16-18、『16 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見えています。18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。』って…。

いかがですか？…まさしく、この時のイエス様が置かれていた状況とピッタリ重なりませんか？…実は、この詩篇 22 篇のみことばは、あのダビデ王によって書き記されたと考えられていますから、その当時から言え

ば、はるか 1000 年も昔のことです。…そんな昔の人物が書き記した預言が、果たして、ここまでピッタリに成就するものでしょうか！

しかも、それだけではありません！…ここ詩篇 22 篇の預言は、あまりにも、イエス様が十字架につけられているシーンとピッタリ合致するので、私たちも気づきにくいのですが…、皆さんは、ご存知ですか？…彼らユダヤ人たちが持っていた、伝統的な死刑の方法って、どのようなものでした？⇒「石打ち」ですよ！…旧約聖書を読んでくださったら、よく分かる通り、ユダヤ人たちが普通、死刑と聞いてイメージしたのは、「石打ちの刑」だったはずなのです！

しかし！それが、詩篇 22 篇などを見てみると、どうも、石打ちの刑ではあり得ないような描写があります。…例えば、ここ 14-15 節のみことばは、「長い、長時間での苦しみ」を訴えているようで、石打ちの刑だと、そんな長い時間はかからないはずですよ。…また、先程見た 16-18 節のみことばもまた、石打ちではあり得ないような…、やはり、これもまた、十字架刑だからこそ、シッカリ来るような預言だと思われま。あのダビデの時代には、存在さえしていなかったような十字架での死刑を、聖書が、1000 年も前から預言していた！って、スゴクありません？

また、どうぞ、詩篇 22:7-8 をご覧ください。そこには、『7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。8 【主】に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。』ということも記されてあります。…これは、今日のみことばではありませんが、今日のみことばの平行記事であるマタイ 27:38-43 には、こんなことが記されてあります。『38 そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけられた。39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」41 同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。42 「彼は他人を救ったが、自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。』

⇒いかがですか？…例えば、ここ 39 節にあるような、道行く人たちが頭を振りながら、イエス様のことをののしったとか、あるいは、43 節の神により頼んでいるとか、神のお気に入りなのだから、神に救ってもらえ！なんていう部分なんて、恐ろしいまでに、詩篇 22 篇とそっくりでしょ！

このように、イエス様が十字架刑によって、そのいのちを失われるということは、“たまたま”起こったのではありません！これは、何百年…、いえ、何千年も前から、神が預言して下さっていた「救いの御計画」なのです！…実に、そういったことのために、神は、罪の無い救い主を処女マリヤから生まれさせて、その救い主イエス様は、私たちの罪を負って、あの十字架上で、罪の贖い…、罪の清算をして下さったのです！…果たして、こんなお方が…、こんな救い主が、このイエス・キリスト以外に居るでしょうか！

●当時の人々の言動！

どうか、今度は、もう1度、今日のみことばであるマルコ伝 15 章に戻ってくださいますか？…その 29 節以降に注目してくださいますと、その当時の人々の“言動”について記されてあります。この時、「道を行く人々は頭を振りながら、イエス様のことをののしった…」ということが記されてあります。今回のみことばには詳しく記されていないので、今日はもう確認をしますが、イエス様と一緒に十字架につけられた2人の強盗の内、片方も、そうでした…。

その時、彼らの内、ある者たちは、こんな風にイエス様のことをあざけたということが記されてあります。29 節の後半から…、『29 …おお、神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。30 十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。』って…。このことは、つい最近、10/10 の礼拝でも学んだことですが、イエス様が、

神殿を壊すなんてことをおっしゃいました？…いいえ！ イエスは、そんなことをおっしゃっておられません！ あの時、イエスは、ご自分のからだのことに言われたし…、もしも、万が一、当時の人々が、それをエルサレムの神殿のことであると勘違いしたとしても、「イエスが神殿を壊す」なんていうことを、決して、イエス様はおっしゃってはおりません！ そうでしょ！…なのに、この当時の人たちは、祭司長たちの陰謀によって、そんな大きな勘違いをしてしまっていたのです。…と言うのも、無理ありません。…と言いますのは、今日のみことばの 31 節に書かれてあるように、この時は、祭司長や律法学者たちも、イエス様のことをあざけていたからです。…ここに彼らの正体が…、彼らの罪が明らかになっているわけです。

でも、どうぞ、皆さん。31 節に記されてある、彼らのあざけりの言葉に注目してみてくださいませ。…そこには、こう記されてあります。『他人は救ったが、自分は救えない。』×2…良いですか？ 皆さん、この発言は、当時の祭司長と律法学者たちが、イエス様に対して言い放った言葉です。そうでしょ！…でも、彼らは、自分たちで認めているのです！「イエス様は、他人を救った！」って…。そうじゃありません？
確かに、この時、彼ら祭司長たちの目から見たイエス様は、あの恐ろしい十字架の上に磔にされて…、「みじめな失敗者」のように映っていたかも知れません…。しかし、そんな彼らが言うのです！「イエス様は、確かに人を救っていた！」って…。

このように、イエス様を通して、たくさんの者たちが救われていたということは、イエス様のことをねたんで、イエス様のことを死に追いやろうとした祭司長たちでさえ認めるところでありました。イエス様によって、多くの者たちが実際に救われていたのです。…でも、彼らの言う「救った」という表現が、具体的に何を意味していたのか、実は、あまり確かではありません。…多分、病からの癒しもあったでしょうし、また、イエス様が悪霊を追い出してくださったということもあるでしょう…。しかし、たましいの救いと言うか、本物の救いに預かっていなかった祭司長たちですから、彼らから見て、誰が救われていて…、誰が救われていなかったか？ということは、あまり分かっていなかったと思われるます。

じゃあ、最後に、32 節のみことばを確認していきましょう。…ここ 32 節には、当時の祭司長たちと律法学者たち、また、イエス様と一緒に十字架につけられた者の言葉として、こう記されてあります。『キリスト、イスラエルの王さま。今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。』また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをのしつた。』って…。

⇒ここで、祭司長たちは、イエス様のことをあざけて、「その十字架から降りてこい！ そうしたら、私たちも信じてやるから！」というような憎まれ口を叩きます。…しかし、イエス様は、降りて“は”こられません。ここでも、最近、2回も引用したイエス様のお言葉を紹介させてください。…これは、イエス様のことを捕らえにきた大祭司のしもべに対して、弟子のシモン・ペテロが剣を取って撃ってかかった時のものです。…マタイ 26:52-54、『52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならない」と書いてある聖書が、どうして実現されましょう。』って…。

ここでイエス様がおっしゃられたように、あの十字架に磔にされている時のイエス様も物理的に言えば、その十字架から降りてくるのが可能でした。しかし、そうはできない理由があったのです！…だって、もしも、イエス様が十字架から降りてしまえば、確かに、当時の者たちは、驚いたことでしょう！しかし、そんなことをしてしまうと、肝心の「救いの道」が閉ざされてしまうのです！そうでしょ！…この前夜、イエス様は、あのゲツセマネの園で、苦しみもだえられて…、死ぬほどの悲しみを経験されてもなお、父なる神様に、「どうか、できましたら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし！わたしの願うことではなく、あなたの

みこころのままを、なさってください。わたしは、あなたのみこころに従います！」という趣旨の祈りを捧げられました。イエス様は、父なる神様のみこころを1番に優先されたのです！…だから、イエス様は十字架から降りるわけにはいかなかったのです。

<励ましの言葉>

さて…、もう、今日のメッセージを終えないといけません。…まだまだ、途中ではありますが、今日、私たちは、イエス様が、あの十字架に自ら進んでかかっていってくださったということを、改めて学びました…。もしも、イエス様が十字架にかかってくださったなかつたら…、もしも、イエス様が、あの十字架から降りてこられたら、私や皆さんに救いの道はありませんでした。私たちにあった唯一の道は、私たちが犯した罪から来る当然の報い…、永遠の裁きでありました。

あなたは、このことを信じていらっしゃるでしょうか？…本当に、イエス様を信じる信仰によって救われておられるでしょうか？…あるいはクリスチャンの皆さん、あなたは、イエス様の十字架を、“本当に”心から感謝していらっしゃいます？…もしも、そうなら、あなたは、全身全霊をもって、このイエス様に感謝を捧げ…、今、あなたは、このイエス様のために生きておられるはずですよ。…だって、聖書のみことばが、そう教えるから！…果たして、あなたは、このイエス様に対する感謝を“本当に”持っておられるでしょうか？…どうか、今一度、このイエス様への愛や感謝を吟味してみてください。

今のあなたを見て、天におられるイエス様が、「この者を救って良かった！この者の身代わりとして、あの十字架にかかった甲斐があった！」と言ってくださいませんか？…どうか、あなたのために、あの忌まわしい十字架にかかってくださったイエス様が喜んでくださるような歩み…、選択をなしていただきたいと思えます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。